

# 新しいふれあい社会

～We are not alone～

平成 27 年 10 月発行（第 19 号）

## 淳風良俗 VS 家族制度の崩壊

認定NPO法人東葛市民後見人の会

障害者委員会情報誌（毎月 2500 部発行）

事務局 我孫子市湖北台 6-5-20

Tel/Fax 04-7187-5657

臨床心理士

樋場 雅子

9月になり、「障害者雇用支援月間」と言われるまでもなく、障害を持つ子どもの親からの相談が相次ぎました。相談内容も就労の問題だけに留まらず、障害を持つ子どもを巡って「親のあり方」「きょうだいの関係」「近隣との関係」など多岐にわたり、今さら「親亡きあと」の深刻な悩みを真正面から身近に示された思いがしました。

その際に、「障害を持つ子どもの母親ですが…」と言い、「障害児を抱える母」とは言わなかつたことに、日頃からの深い思いがこめられていて、より強いこだわりのようなものを覚えました。

そのこだわりめいた思いを一掃してくれたのは、相談 3 例目となった A 家の家族物語でした。

A 家は両親と男児 3 人の核家族で、次男の B 君はダウン症候群による発達の遅れはありますが、両親は 3 人の子どもを、わけへだてなく育てています（母親の表現）。

夏休みの或る日のこと、町内会主催の「子ども広場」に、A 家の兄弟 3 人もそろって参加しました。その途上、日頃は交流のない E 君が、B 君を指さして、「あの子変な顔をしているね」と言って、真似してみせました。B 君の兄 C 君は、すかさず、「もしもお前の弟が、病気で変な顔になつたらどうする！」と、立ちふさがりました。E 君は、それがよほど悔しかったのか、広場に着いてから、遊びの輪を抜け出して、B 君の手荷物に B 君の似顔絵を落書きしました。それを B 君の弟の D 君が見てしまいました。D 君はその仕返しに E 君のシャツに、大きく×印を書きました。夕方になって、E 君のお母さんは、そのシャツを持って怒りをあらわにして、A 家にやってきて D 君を咎めました。A 家のお母さんは、オロオロしてしまいましたが、D 君は泣きながらも、今日の出来事を懸命に、話しました。それを聞いた E 君のお母さんは、「悪いのはうちの E だったのね。ごめんなさいね」と素直に謝り、家に引き返すと E 君を連れてきて、B 君を交えた兄弟 3 人に謝らせました。

A お母さんはお父さんの帰りを待ち、子どもたちを交え、今日の出来事をつぶさに報告しました。お父さんは、C 君と D 君を抱き寄せ、「今日は、本当にありがとう。これからも B のことを助けてあげてね」と優しく言いました。B 君までが「ありがとう」と言って、ぺこりと頭を下げました。

その夜、両親は、3 人の子どもたちは、日頃から自分たちの子育ての姿勢を見取っていたのだと話し合って、一献酌み交わしたと言います。

私はこの時、唐突に「淳風良俗」という美しい言葉を思い起こしました。

和辻哲郎氏は、代表的著書『風土』で「家族制度が日本の淳風良俗」として、力説されることによつても知られている」と述べ、日本の家族制度を絶賛し、人情に厚く素直で好ましいことと説明、細やかな人情の気風で、美しい風俗をもつ地域のことも指すと言っています。

A 家の睦まじく、ひたむきな家族愛、E 君のお母さんの良識ある親和的な言動は、「淳風良俗」というにふさわしいと、確信しました。

ところが、この物語には後日談がありました。それがAお母さんを傷つけ、反省させて、自らの「心」の問題として、相談に及んだのでした。

その日から数日後のこと、スーパーでAお母さんに、親しげに声をかけてきた主婦がいました。彼女は辺りかまわぬ大きな声で「子ども広場でのことを聞いたわよ。Cちゃんは本当に立派ね。Dちゃんも必死だったんでしょうね。それにしても今どき3人の子どもがいるのはめずらしいわ。大変ね。障害児も抱えているんでしょうね。本当に尊敬しちゃうわ」と言いました。

Aお母さんは、「私のことを褒めてくれたのを喜べません。反発すら感じます。ことさらに、今どき3人の子どもを育てているという言葉、障害児を抱えているという言葉が、耳について離れません。3人の子どもに恵まれて、育てていることは、めずらしいことでしょうか。子どもは、手荷物ではありません。障害があるからと言って、抱えるものではありませんよね」と、言った後、「実は私たち〈障害を持つ子どもの親の会〉では、障害を背負って生まれてきた子ども、生育の途中で、障害を背負ってしまった子どもがいとおしく、『親として申しわけない』と思い、ハンディはハンディとして、幸せに育ってくれることを願ってやみません。『抱える』などとは、露思ひません。それは私の独りよがりでしょうか。私の思い上がりでしょうか。奢りでしょうか。私の『心の問題』として教えてください」と、訴えるのでした。

その訴えを聞きながら、私はそれには答えずに「私の話を聞いてください。子ども広場での話、〈障害を持つ子どもの親の会〉の話には感動しました。これらのこと、私ども相談員の教科書にさせてください」と、お願いしました。全く主客転倒した話ですが、私の正直な気持ちでした。

Aお母さんは、「私たちの話が教科書なんて…、恥ずかしい…。でもうれしい。せめてモデルと、言ってください」と笑って、「それが今日の私の質問に対する答えなんですね」と言い、改めて、住所氏名を名乗り、1時間余に及ぶ相談は思わず展開で終わることが出来ました。

突然ですが、ここで180度立場を転換した問題を提起します。ご一緒に考えてみてください。スーパーで、Aお母さんに話しかけ、その話が心ならずもAお母さんの心を傷つけた言葉、

○ 今どき、3人の子どもを育てている、に続く言葉として、「大変ね」「めずらしい」とは、言わないでしょうか。

○ 障害者（児）がいる家族に対して、「障害者を抱える」とは言わないでしょうか。

「汝らのうち、罪なき者はこの女を打て」（新約聖書ヨハネ伝8章の7）とまでは言いませんが、問題意識のないまま、相手を傷つけていることにも気づかず、話していることはないでしょうか。

かくいう私も障害を持つ人（児）を「抱える」という表現には、いささかこだわりがありました。

本月報第10号（27年1月号）で「認知症の高齢者を抱える家族」と題して問題提供した際に、冒頭に、「抱える」という表現には、本人を含めて、家族全体がこうむる受動や受苦を抱えているというニュアンスが含まれていて、暗いイメージを受けます。と述べながら、それに代わる言葉が見つからないままに、過ぎてしまい、咎められることもありませんでした。

そこには、高度に産業化され、商業、経済が中心の情報化が進んで、変動する現代社会のなかで、家族制度・家族機能も大きく変化して、核家族化を中心とした生活が、通常のこととなっています。

核家族は、家族が健康で問題ないときは、まとまりのよい集団ですが、家族のなかで助け合う人も少なくなり、親戚や地域の人びとの結びつきも希薄となり、気軽に相談したり助けを求めることができにくくなります。「21世紀は家族制度の崩壊」と言われる所以ではないでしょうか。

核家族化は、基本的な「家族機能の在り方」にも警告をもたらしています。

F家のひとり息子のG君は、中学2年在学中、成績優秀で、県内でも御三家と言われる高校への進学をめざして勉強一筋の、両親も自慢の子どもでした。ところが或る日の夜のこと、夜遅くまで机に向かっているG君のため、夜食のラーメンを運んできた母が「がんばってね」と声をかけて、部屋を出ようとした後背に、いきなり「この上、何をがんばれというのだ!」という罵声とともに、ドンブリごとのラーメンが飛んできました。母親は、頭が真っ白になってしまって、何も言わずそのままの場の散らかりを片付けただけでリビングに戻りました。リビングでは父親がソファーに寝転び、テレビを見ていました。母親は、いま起きたばかりのことをとつとつと涙ながらに話しました。父親はソファーから起き上がったものの、テレビを消そうともせず、「Gは疲れているのかなあ」と言っただけで、また寝転んでしまいました。

その夜をきっかけにして、G君の母親への暴力は次第にエスカレートして、手がつけられなくなってしまいました。当然のこととして、学校にも行けなくなってしまいました。

父親は、某大会社の課長で、同期入社の社員の中では、出世頭として得意の絶頂にありました。しかし、Gによるラーメン騒動の夜以来、疲れて家に帰っても、妻から泣き言を聞かされるだけで、散らかしっぱなしの室内をみると、気力も失せて、仕事もおろそかになり、帰宅の途中に酒におぼれ、午前様帰宅となりました。

ここに至って、母親は密かにHメンタルクリニックを受診しました。H院長は家族背景を聴いて、母親はうつ病、G君は思春期危機、父親は上昇停止症候群と呼ばれる状態にあることを説明して、聞めぎ合うことなく、辛くなったら、いつでも誰でも、ここへ駆け込むように、と伝えました。

驚いたことに、まっ先に駆け込んできたのは父親でした。父親は「辛いのは会社で仕事の能率が悪くなったことではなく、家庭で父親として何をしてよいのか分からぬことです」と訴えました。H院長は、「父親として、今すぐにでもしなければならないのは、奥さんと向き合って、ふたりでG君が暴力をふるう理由を考えること、G君から聞き出すのではなく、両親ふたりで話し合って、探り出すこと」と宿題を出し、答えとしました。

数日後、両親はそろってクリニックを訪れ、宿題の答えを報告しました。それによると、

- ① Gには、親にも教師にも言えない悩みがあるのではないか、
- ② 暴力がまず母親に向けられ、それが続いているのは、母親の存在がうつとうしいのか、
- ③ 逆に、父親にはもっと自分に目を向けてほしいのか、

と、箇条書きにしたものを示し、「この答えを出すのに、3日もかかりましたが、不思議なことに、Gの暴力は間違になって、母親をひざまずかせ、謝らせる行為はなくなりました。それだけでも、親としての被害者めいた気持ちが癒される思いです」と言いました。

H先生は、宿題の答えは100点満点。実は、家庭内暴力に悩む家庭の状態像として、統計的に、

- ① 父親は社会的に評価が高く、管理職にあることが多い。家庭のことは妻まかせ。
- ② 母親は家庭のことは一切引き受けている。子どもに対し、過保護、過干渉、過期待である。
- ③ 子どもは素直で成績優秀、ひと口に「よい子」と言われていた、ひとりっ子が多い。

と説明、まるでF家はその見本のようですね、と言いながら、G君の行為については、その理由を問い合わせすことなく見守ること、その上で経過を教えてほしい、と第2の宿題を出しました。

そして、「子どもの家庭内暴力は、家族機能、ひいては社会問題に対する、子どもからの厳しい警告ではないでしょうか」という課題も添えられました。

改めてA家とF家の家族背景、家族力動、理念、特徴を並列して考えてみました。

	A 家	F 家
家族背景	両親と子ども3人の核家族。 長男は小5。次男は小3、ダウン症の障害がある。3男は小1、やんちゃ坊主。	両親と中学2年の男子一人の核家族。 成績優秀で、勉強好きで、親の期待を遂行するようがんばっていた。
家族力動	両親の子育てに対する理念は完全に一致。 子どもを分け隔てなく育てている。 子どもたちも、両親の姿勢を学びとって、仲がよい。	父親は大会社の課長。会社の仕事第一で、家庭のことは妻任せ。 母親はこれを受け、子どもに対して過保護、過干渉、家庭内の会話は乏しい。
特徴	障害を持った次男の存在が、家族の心をまとめているところがある。 淳風良俗と言うにふさわしい家族。	競争社会の中での価値観やエネルギーに家族全員が支配されている。 今日的な課題分担型の家族。

とまれ、今さらに尤もらしく両家を対照的に並べて、家族機能の在り方を問うているようですが、それが目的ではありません。H先生の言葉に従い、基本的な家族機能の変化は、ひいては社会問題につながることを考える資料にしました。

高度に産業化されて、モビリティーの高い社会では、伝統や規範には縛られないライフスタイルの多様化をもたらしました。シングルライフや同棲、離婚によるシングルマザーも多くなりました。同時に、いわゆるDINKSと呼ばれる子どものない家庭も出現し、少子化に拍車をかけています。

少子化については、その数が問題にされることが多いようですが、ここではひとりっ子について、考えてみたいと思います。子どものいる家庭で、ひとりっ子はその4割を占めています。

「ひとりっ子は、それ自体が病気である」と言った識者もいましたが、ひとりっ子は家族の中で、特にきょうだいから対人関係のスキルを学ぶことができません。そのため対人関係、なかでも、情緒面で問題がみられることがあります。競争社会のストレスとも連鎖して、家庭内暴力、いじめ、不登校、無気力、ひきこもりが起きてくる、と説明されています。

現代社会は変動が激しい故に、その影響が一方的に市民の上に及んでいるかのように見えますが、それをもたらしたのも、解決するのも社会であり、家族であることを、心したいものです。

#### 〈こころの電話相談室〉 心の悩み、心のケア、心の健康に関する電話相談室をご利用下さい。

相談日 毎週木曜日 午前9時～午後9時 (11月19日は休みます。)

相談担当 横場主任相談員 電話番号 04-7100-8369 個人情報は厳正に取り扱います。

〈市民のまなざし〉 ★二つの家庭の夫婦愛、兄弟愛、親子の絆という肉親間の美しい愛情物語に接し、久しぶりにもらい泣きました。家庭の問題を解決できるのは家族です、という筆者の力強い結語が輝きます。★目を転じると、「親亡きあと」の障害者問題は家族にとって最も深刻な悩みです。認定NPO法人自立サポートネット流山・勝本理事長の説くその秘訣とは、「親が元気なうちにやっておくことを一つだけ挙げれば、自分が死んだあとに障害者の子供が頼れる人をたった一人でよいから見つけておくこと」。★障害者の尊厳や人権を擁護し、虐待を防止するための最も有効な制度が成年後見制度です。「すべての障害者に市民後見人を!」、私たちの活動の究極の目標です。★来月は高齢者問題を探りあげます。乞うご期待(h)。 独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業